
空、浮雲、晴天なり

青春求人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空、浮雲、晴天なり

【Nコード】

N4311Z

【作者名】

青春求人

【あらすじ】

この小説(?)は突発的に思いついたHSS(ハイパーショートストーリー、ハイパーなショートストーリーではなくハイパーにショートなストーリー)を書きなぐってジコマン的に投稿する小説である。故に作品の練度については作者は一切の責任を持たない。

ついでに言うと一応このHSSの登場人物は全員が同じ学校に通う生徒であるという裏設定があったり、出てくる人物同士にビミョーに繋がりがあつたりする。

以上を踏まえた上でサイトを開くか即座に戻れ右をするかを決めて
いただきたい。

上木拓也

空は蒼い。眩しいほど透き通ってどこまでも広がる青空。

雲は白い。どこまでも自由でどこまでも行ける流れ雲。

今日は晴天。吹き抜ける爽やかな風に青く光る空に浮かぶ白い雲。

俺の気分は曇天。気分は最低思いは重いし気持ちも沈みきり。

俺は叫ぶ。意味なく叫ぶ。

「俺が何をしたって言うんだ

ッッ!!」

今日俺こと上木拓也は、彼女にフラれた。

「アッハッハッハッ」

「爆笑すんなッ！」

この他人おれの不幸は蜜の味と言わんばかりに笑い転げるクソ野郎は俺の幼馴染み名は上野夏希、名のとおり夏のように明るく爽やかでサッパリしたヤツだ。ちなみに野郎ではなく女だ。

今日は朝から最低最悪災難な一日だった。

目覚ましの電池が切れて寝坊するし朝飯が用意されていなく学食で無駄な出費をしたし授業中に寝てもいないのに先生に当てられまくるし……。

極めつけは放課後。突然現在付き合っている 正確には付き合っていた 女子に呼び出され、ハテ何事かと首を傾げながら会ってみれば突然『他に好きな人が出来たから別れて』と言われポカんとする俺を置いてサッサと帰ってしまった。

という俺の波乱万丈な一日をコイツに話して聞かせたところ冒頭の大笑いへ続くというわけだ。

「く……ふふふ、しかし、そりゃ、災難だったね……プッ！」

「てんめえいい加減笑うのやめるコラ！」

精々睨みを効かせたつもりだったがあまり効果はなく、ゴメンゴメ

ンと言いながらなおも腹を抱えて笑っている。

「つーかなんで俺はコイツにこんな話をしてんだ。

「ていうかなんで私にそんな話したのさ？」

今まさに俺が思い至った疑問を夏希が訊ねてくる。

ふむ、なぜだろう。強いて言うならば何となく、なのだが。

「なんか気づいたらココに足が向いていたというか、とりあえずお前に愚痴つとくかー、みたいな」

と思ったままを口に出した。のだが……。

夏希は少し長めのまつ毛に縁どられた目をパチパチと瞬かせ、不意にフイッとそっぽを向いて早口に捲し立てた。

「ま、まあ愚痴ぐらいならいつでも聞いてあげるしてかアンタ何かあったらここに来るクセ昔っからだよー」

アハハハと何故か焦った様に笑っている夏希を眺めるが、まったく意味が判らない。とりあえず馬鹿にされている風ではないが……。

「そ、それよりさ！ 彼女の話だけど！」

「お、おう」

明らかな話の逸らし方だが、なぜだか逆らいがたいオーラを夏希が放っていたのでとりあえず乗っかっておく。

だが

「実際、別れたのは正解だったと思うよ」

などと真剣な顔で言う。

果たして何が正解なのか。あれか、俺には独り身がお似合いだと言っているのだろうか。

そんな俺の想いをバッチリ読み取った 訳ではあるまいが、夏希は慌てて注釈を加えた。

「い、いや、別にアンタがどうって話じゃなくてさ。……やっぱり知らないの？」

「……………お前が俺ん家に遊びに来たときに俺のプリンを勝手に食べたことなら」

「今はカンケー無いでしょ！ ゴメンナサイ！」

勢いで謝られてしまった。

しかしこの俺が謝罪の言葉だけで満足するはずもなかるう、ふふふ
さてナニをしてもらおうか。

と悪代官風に考えていた俺にそうじゃなくてえ！ と今ので全てチ
ヤラにするつもりらしい夏希がツッコむ。

「アンタの元カノの話！ あの人、色んな男を遊び歩いてるって噂
だよ」

「ま、マジっすかつ！？ ……にしても二週間で、まったく遊ばれ
てもないんすけど……」

俺としては少しくらい遊んで欲しかった。主に下的な意味で。

夏希がジトー……と蔑みの目で見下ろしているのは俺の思考がトレ
ースされたわけでは無いと思いたい。

「……ふん。残念ながらソッチの“遊び”はして無かったみたいよ
？」

「ハハハ、ソッチってどっちか分かんないな
いや本当に。」

「……………エロ猿」

「もっと罵ってください」

「……………豚野郎？」

「もっと激しく！」

「演技だよネツ?! なんかマジな顔してない!？」

「うむ、俺って実はエムっ気あるかも」

殊勝に頷く俺を見てうわー、と夏希が嫌そうに後ずさる。その顔に
浮かぶ侮蔑の表情にまた興奮する……………あれ？ なんかマジで興
奮してきたんだが。

「ま、まあアホなこと言ってないで、本題に戻すわよ。 訊くけ
ど、アンタあの子にいくら貢いだ？」

俺の纏う空気に危険なものを感じたか、またも無理やりな線路変更
をする。しかし貢ぐとは人聞きの悪い。まあ俺とて男だ、好きな女
にはプレゼントの二つや二つ。

「あ、俺一回もプレゼントとかしたこともなかったわ」

小声で『ダメな男……』と呟かれたのは俺の幻聴だと思う。

「ま、今回はそれで正解だったってワケね。たぶんそれが原因よ、アンタが早々に捨てられたのって」

「どういう事？」

「つまり、あの子は色んな男を誑かして貢がせて、飽きたらポイツ、てことらしいよ」

なんと、そんな女に俺は騙されるところだったのか。今回だけは自分の朴念仁っぷりに感謝である。

いやしかし

「二週間で切り捨てって早くな？ 普通そんな序盤にプレゼントとかしねーだろ」

よもや世の男性陣は好きな女の心を繋ぎ止めて置くために物で釣るのが当たり前なのだろうか。だとしたら色んな意味で（主に俺の財布事情的に）由々しき事態である。

しかし幸いにも、そんなことは無いらしい。

「まあね。だからアンタが捨てられたのは他の要因もあるかもねえ。それにしても、私だったらそうやって物でしか相手を判断できないのって淋しいと思うんだけどなあ」

ブー垂れるように顎を手のひらに乗せて支えるその仕草が可愛くて不覚にもドキツとした。

「ん？ どうしたの？」

「な、何でも」

夏希は怪訝そうな顔をするもそれ以上踏み込んでこずに窓の外へ視線を向けた。

よく考えればコイツって普通に可愛いんだよなあ。見慣れすぎて忘れがちだけど。

短めのサッパリした茶髪に少し長めのまつ毛に縁どられた瞳。シャープな輪郭と細身の体躯は華奢な印象だが、全体的に漂う体育会系っぽい雰囲気ですマートという印象へと昇華されている。

だが今はその体育会系オーラも鳴りを潜め、どこか可憐な少女然と
している。

更に今は夏希の部屋の中に二人つきり、家にも他に家族は居ない。

こ、これは何かマチガイが起きてしまうフラグでは……！

などとアホなコトを考えていたせいで、不意に掛けられた声に挙動
不審に応じてしまった。

「ねえ」

「ふあ、はいッ？ な、なんっスかッ？」

俺の態度に怪訝そうに一瞥くれてから、いつの間にか夕日が差す窓
の外を眺め、続ける。

「人間にはね、『幸福度』ってモノがあるの。で、その幸福度は不
幸があればあるほどデツカイ反動でくると思うんだ。その逆も然り、
だけどさ」

一体何の話だろうか、状況の読めない俺は「はあ」と気の抜けた返
事をする他ない。

「でね、私はその幸福度は月単位とか、年単位とか、そんな大規模
なモノじゃないと思うんだ。例えば、『今日はコレコレこういう不
幸があったからきつと明日はこれくらい幸福を得られる』み
たいだね。もつと言えば一日の中にも幸福と不幸のバランスがある
と思う」

「ふむう、 つまり、どういうことデスカ？」

いくら考えてもこの話の行先が読めない俺は首を傾げるばかりであ
る。

そんな俺をジトツと半眼で睨みつつ、やはりそっぽを向く。そ
の顔が僅かに朱に染まっていたのは気のせいではあるまい。

「つまり、今日の不幸はきつといつか幸福となって返ってくるよ、
って話」

ああなるほどこれはつまり

「慰めてくれてんの？」

「~~~~~ッつつさいー！」

指摘したとたん 顔を夕日色に染めて短く罵倒された。

いじけて口を尖らす俺をチラと確認した夏希が、なにやら決意したような真剣な顔で一歩、椅子ごと近付いてくる。

「な、なんででしょうか……？」

夕日をバツクに浮かぶ夏希の顔はガラス細工のように繊細で綺麗で、僅かに圧倒され少し身を引く。

「ねえ、今日の不幸を補完できるだけの幸福度を、あげようか？」

「そ、それはどういう」

俺の言葉は、最後まで言い切れなかった。

突然夏希が肉薄し、鼻先が触れる程の距離に夏希の端正な顔がある。心拍数は天井知らずに上がり破裂するのではないかという勢いでピートを打っている。息をするのを忘れ、空気が足りなくなり「ひぐっ」と謎の声を漏らしてしまう。

「 本当に、あんたって朴念仁だよな。なあんにも気づかないで私に彼女との近況報告したりかと思えば今までどおり接してきて家にも普通にくるしさ」

「い、いや、あの、うあ……」

どういう意味、と訊ねようとして、今更ながらある一つの結論に至り、イヤイヤまさかそんなバカなと否定する。

しかしこれは、この状況と発言から導き出される答えはつまり、つまり

「私、上野夏希は、上木拓也のことがずっと、ずっと好きでした」
うわあ……と心の底からなんと呼んだらいいのか分からぬ感情が沸き上がる。

人の居ない女子の部屋で二人つきりで、こんな目と鼻の先、ともすれば唇が触れ合いそうな距離で囁くように告げられた純粹な好意に、どう反応していいのか分からず硬直する。

しばらくそのまま俺の反応を伺っていた夏希だったが、焦れたように更に近づき、

「もう、いいよね、ここまで来たら後戻りをする気はないし」

なんだか据わった目をしていた気がした瞬間、

「……………んうつ!？」

人生十六年の間に一度も感じたことのない、何とも説明のつかない
感触が口を塞いだ。

極上のマシユマロのような柔かさに抱かれながら、なるほど確かに
これは今までの人生のすべての不幸を補ってあまりある『幸福度』
だな、とどこか冷静に考えながら、更に強くなる愛撫の心地よさに
全てを委ねていった……………。

【終わり】

上木拓也（後書き）

後で上野夏希篇も更新するかも

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4311z/>

空、浮雲、晴天なり

2011年12月14日22時46分発行